

# 平びらびら伝

其の二

源氏軍をなぎ倒すの巻



金井哲夫

芳一の耳を持ち帰ったあの夜以来、琵琶亡霊「鎧」の平曲の噂は、あちらの墓、こちらの古寺の平家の亡霊仲間にも広がっていった。むろん、その語りのうまさではなく、被害に関する噂だ。

実際、あれを聞いた亡霊たちは、鬼火が湿気て三日間火がつかなかったり、ガマガエルを聞いただけでまたアレかと怯えて体が震えたり、亡霊なのに夜が怖くて外に出られなくなるといった心的外傷に悩まされていた。

そもそも亡霊は肉体を持たず、現世への未練やら恨みやら、言うなれば、とっくに死んでいるくせに「死にたくない！」という気力だけで存在しているだけのものがあるため、心的外傷はまさに、致命的な物理的外傷であった。亡霊でいるための気力を失った亡霊は、そのまま消え去るか、霊界の重力によって地獄に引き落とされてしまふかのどちらかだ。亡霊にとって精神的ダメージは、己の存在そのものを脅かす一大事なのであった。



当の本人は、そうとは知らず、あの夜から妙に調子がつき、方々の平家の墓や、ゆかりの古戦場を渡り歩く慰問ツアーに出ていた。あの翌晩、鎧が疲れ切って寝ている間に、全員が揃って墓から引越してしまったのだが、自分の語りにまったく疑問を持たない鎧は、あまりの素晴らしさに感動した亡霊たちの魂が浄化され、極楽浄土に召されたのだと勝手に思い込んでしまった。そこで自分の語りで各地の平家の亡霊を癒やしてやろうと余計なことを思いつき、旅に出たというわけだ。

鎧の語りの脅威についてまだ聞かされていない墓では、普段から退屈している亡霊たちが喜んで鎧を受け入れ、気の毒なことにまともに聞いてしまうから、甚大な被害を被るといった具合だ。

現世では、とつくの昔に片が付いている源平の戦いだが、死後の世界では今もずっと続いていて、各地の古戦場では、ほぼ毎夜、源平合戦の三連戦が繰り広げられている。むしろ、生きる目的も死ぬ心配もない亡霊たちには、それしかやることがない。それだけに、鎧の語りは亡霊平家軍の存亡につながる大問題でもあった。

そこで、緊急に対策を講じなければと、亡霊平家緊急災害対策会議が招集され、



専門家が知恵を出し合った。鎧をひっ捕まえて琵琶を没収すれば早そうなものだが、そこはお上品な平家の亡霊。どうにかもめ事にせず、穏便に済ませたい。となれば、とりあえずは専守防衛だ。もし鎧が「びよーん」を始めたら、一、衣服の乱れを整えて肌の露出を少なくし、二、音源に向かって正座をして身を安定させ、三、両手を伸ばして上半身を前に倒してできるだけ体勢を低くし、四、両腕で両耳を挟んでなるべく聞かないようにすること、という正しい耐衝撃姿勢を通達するしかなかった。

これが鎧本人から見ると、全員がこちらを向いて平伏した状態に見える。当然、何も知らない鎧は、「そんな私の語りがありがたいのか」と勘違いをする。耐衝撃姿勢のおかげで、無事に鎧の語りによる打撃を最小限に抑えられた亡霊たちは、終了後、みなが肩を抱き合って無事を祝い涙した。何も知らない鎧は、「そんなに感動したか」といい気になる。そのため、鎧の語りはますます猛威を振るようになっていったのだ。

さらに困ったことに、平家の一般亡霊たちは、なるべく事を荒立てないように、鎧を「先生」と持ち上げるものだから、ま



すまず調子に乗る。それまでは、ふらりと現れて道端でびよーんと琵琶を鳴らしては人々を恐怖のどん底に陥れていた鎧だが、偉くなったもので、「何月何日、○無縁墓地会館にて平曲リサイタル」などと公演の予定を知らせるようになった。しかしこれによって、鎧の針路と被害予測が読めることとなり、亡霊たちにとっては有りがたかった。

こんなことがあった。公演予定が知らされたある墓地では、去年から予定していた平家亡霊会の旅行の予定と重なったと言いついて、当日、全員で墓から避難した。鎧が意気揚々と到着してみると、知らせてあったにも関わらず誰もいない。みんなを喜ばせてやろうと来てやったのに、歓迎のかの字すらない。見れば墓の奥でひとりの亡霊が平伏している。留守役の亡霊だという。

「先生のご公演を賜るというこの上なき幸運に恵まれ、亡霊一同大変に喜んだのですが、年に一度の旅行に重なってしましまして、急いで宿のキャンセルを申し込んだのですが、直前とのことゆえキャンセルがかなわず、全員、先生の語りが聞けないのは残念でならぬと後ろ髪を引かれる思いで出発いたしました次第です。無礼を承知で厚かましいお願いをいたしますが、先生にはぜひまたの機会にお越しただけたらと……」

そう聞かされた鎧ははたと膝を叩き、「ならばこうしよう。その宿へ拙者が赴き、宴会で語ろうではないか。みなには内緒にしておき、スペシャルゲストとして登場するのだ。緞帳は下げたまま、何の前触れもなく拙者の語りが始まる。みなは何事かと舞台を見る。そこで幕がしずしずと開いて拙者が登場というわけだ。どうだ、みな喜ぶぞ！」と提案した。

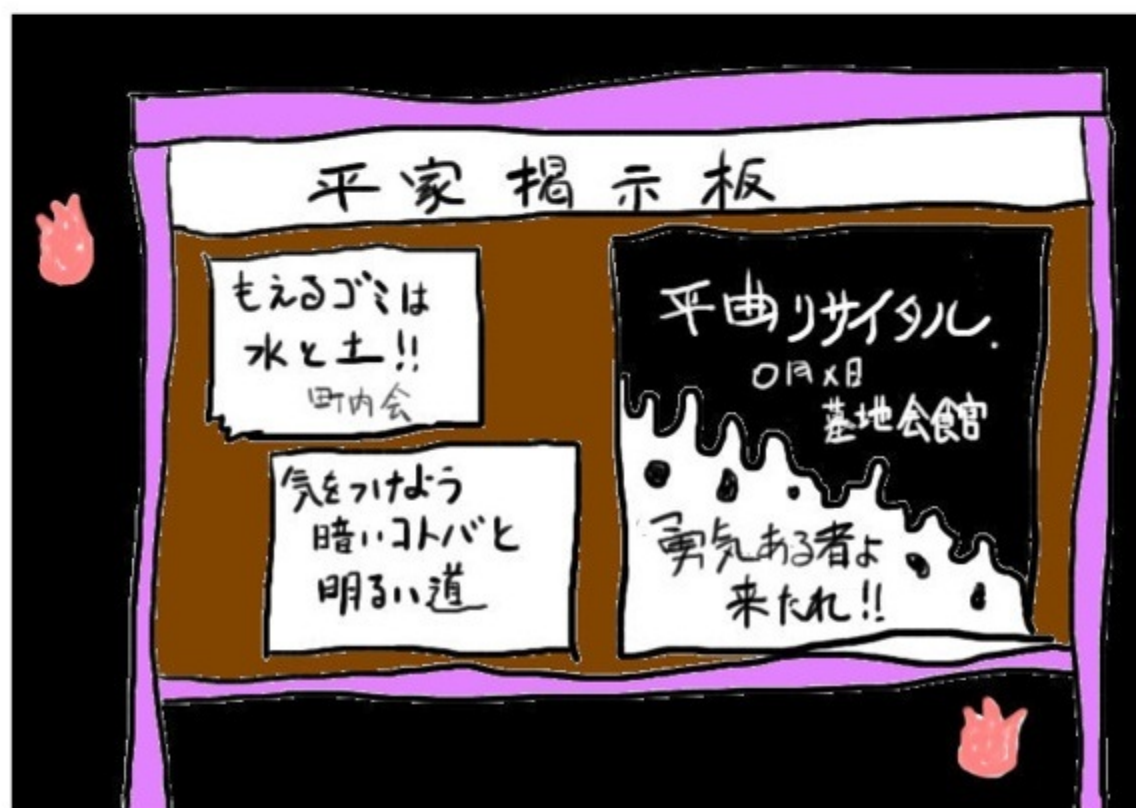
「と、とんでもない！ それでは身が守れませぬ」

「どういう意味だ？」

困り果てた留守役は、咄嗟にこう言い訳した。

「じつを申しますと、先生は連日の語りでお疲れのようで、その大切なお喉にもしものことがあっては平家一門の損失。そこで我ら一計を案じまして、先生がお気兼ねなくお休みいただけるよう、こちらの勝手に都合が悪くなったなどと申したのであります」

これを聞いて気をよくした鎧は、せめてもの礼にと、その留守役に対して個人的に語りを聞かせるという暴挙





に出た。うろたえた留守役は耐衝撃姿勢を取るまもなく、近くにあった地面の穴に飛び込んだが、それは亡霊を落とし込むために霊界の各地に鬼たちが掘ってあった地獄への落とし穴だった。近くで留守役からの連絡を待っていた亡霊たちは、いつまでたっても連絡が来ないので心配になり、みなで墓に戻ってきたところを鎧と出くわしてしまった。鎧はみな心の遣いに対して礼をしたいと、普段以上の力を込めていきなりびよーんと始めたからたまらない。その墓は一瞬にして壊滅してしまった。

そんな惨事が重なり、再び、亡霊平家緊急災害対策会議が招集された。

「なんとか穏便にアレを止めさせられないものかのう」と全員が頭を抱えるなか、一人が妙案を思いついた。

「いやいや、見方を変えれば、あれは強力な秘密兵器でござる」

その言葉に全員が顔をあげた。

「あやつの平曲を源氏の軍勢にぶつけるのでござるよ」

「だが、どうやって源氏軍に聞かせたらよいのだ」

「合戦ばかりではつまらない、たまには芸術で競い合おうではないかということ  
で、平家を代表する親善芸術大使として送り込むのでござる」

「いや、そのような奇襲は牛に火をつけて我が陣営に放つような野蛮な板東者どもの考えること。我ら平家としてはお下品にすぎませぬか」

「表向きは文化交流でござる。鎧もまったくそのつもりで赴くのであるから、奇襲ではござらん。相手に甚大な被害が及ぶのは、あくまで聞く側の油断が招く結果」

「しかし、いかにバカの源氏とは言え、すぐに気づくであろう。あやつが捕らえられたらなんとする？」

「構わぬではないか。一石二鳥でござるよ」

「そりゃ妙案。ふおっふおっふおっ」





突然の大ブレイクで、名誉ある親善大使に任命されたと思い込んだ鎧は有頂天になり、まずは因縁の地、深夜の六波羅に現れた。さすがに源平ゆかりの史跡とあって、双方、有名無名の亡霊武者たちが毎夜集まっては合戦を繰り返している。当然、応援団やら見学の亡霊もさらに多く集まり、合戦のスター亡霊たちを取り囲んで鐘や太鼓で声援を送っている。

この夜は、まだ両陣営が対峙して、互いの様子を窺っているときだった。その張り詰めた空気の中、平家軍の中から突然現れたのが、「源平友好」「歌は友だち」と書かれた大きな幟を背中に2本立て、琵琶を持った鎧だった。

驚いたのは味方の平家軍と平家側応援団だった。いきなり現れた鎧に大いにくるたえたが、そこは訓練が行き届いているので、みな一斉に、鎧に向かって耐衝撃姿勢をとる。これには源氏の軍勢も驚いた。全員がこの幟の男に平伏している。しかも、敵陣の中心では平清盛も同様に平伏しているではないか。どんなに偉いヤツが現れたのか。それが源氏の陣営まで歩み出てきたから、源氏軍は身を固くした。

「源氏のみなさま、平家一門を代表して、日ごろのお付き合いの感謝を込めつつ、平曲をお楽しみいただきたく参上つかまつってございます。今宵はたっぷり、語らせていただきますゆえ、存分にご堪能くだされ！」

ありや何だ？ 敵陣で自軍の負け戦の物語を語るとは、よほどの人物か馬鹿かのどちらかだ。しかし、そんな馬鹿になぜ平家の連中は平伏すのだ？ やはりめちやくちや偉い人物なのではないか。しかし結局、平家はみな馬鹿だから馬鹿の親玉に平伏すのだと、未体験の危機に直面した源氏の軍勢は正常化バイアスがバツチリかった結論を出してしまった。

そこへいきなり「びよーん」と琵琶の音。「ぶわっほん、がっほん、げほげほ、あーあー」と不気味な発声練習に続き、「ぐえんずいのつはものどむあー！ すーでーにふえいくえの……」と始まったからひとたまりもない。いきなり煙をかけられた蜂の巣の蜂のように、上へ下への大騒ぎ。逃げようにも腰が抜けてその場を動けず、鎧の口から飛び出す黒板を伸びた爪で引っ掻きながら脇の下をくすぐられるような不快極まりない音波の塊が、慌てふためく源氏側亡霊たちをちぎっては投げちぎっては投げ、名だたる武将たちをもばったばったとなぎ倒して



いった。

ひとしきり語ると、源氏陣営に動く者はいなくなつた。語りが終わったことに気づいた平家の群衆は、身を起こしてやんやの喝采を贈る。それを聞いて鎧は平家側に振り向き手を振るが、その瞬間、平家の亡霊たちは耐衝撃姿勢に戻る。鎧は悦に入る。

ところが、源氏軍の中から元気な声が聞こえてきた。

「おい、お前」と若々しく力強い男の声だ。振り向くと、若武者風の男がしっかりと足取りで、やはりダメージをひとつも受けていない従者を従えて鎧に近づいてきた。鎧は自分の語りを聞いて平然としている者と初めて出会ったので驚いた。

「そなたも、お供の方も、それがしの語りを聞いて何も感じられませぬか」

「別に」と男はぞんざいに言い放った。

# 源義平 第4回





「みな感動のあまり身動きが取れなくなるのが常であるが」と、あたりを見回すと、もう誰もいない。この隙に全員が避難してしまったのだ。はてな、と思う間もなく男が言った。

「あいにく、オレには首がない」

見ればなるほど首がない。供にも首がない。

「首がないから耳もない。そんなわけで、音を直接体に感じることはないから無事なんだな」

「無事とは？」

鎧はまだ、自分の語りが人々に危害を与えていることに気がついていない。

「申し遅れた。オレは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が長子、鎌倉ノ悪源太義平だ」と男が名乗った。

「おお！ お噂に名高い源太義平様でありましたか。お顔がわかりませんで、大変に失礼を申しした」

「あたりまえだ、首がないんだから。気にするな」

源義平と言えば、鎌倉の悪源太として知られる人物だ。関東出身の暴れ者で、六波羅で平家軍に捕らえられ首を斬られている。そのときの太刀取り、難波経房

# 源義平 その2 首、四



に、義平は「うまく斬れ。下手くそに斬ったなら、お前がしゃっ首に食い付くぞ」と言った。「首を斬られてどうやって食い付くのだ」と聞かれた義平は、「今喰らい付こうと言うのではない、いつか必ず雷となって蹴り殺してやろうぞ」と答えた。その数年後、平清盛の供で摂津に赴いた難波経房は、実際に雷に打たれて死んだという伝説が残っている。

「その、お前がさつきからおやつてるびよりんっての、すげえ威力だな。その妖術をオレにも教えてくれ」

「おっしゃる意味がよくわからんが」

「雷は派手なわりに一発勝負なところがあって、あんまり実用的じゃねーんだよ。その点、お前のそれは大量破壊

兵器として効率がいい」

「あいや、これは平家物語でござるが」

「おいおい、いくらオレが無教養な板東者だからといって、平家物語かそうでないかぐらいはわかる。いい加減なことを言うどカンとやるぞ！」

「め、めっそももない。これはれっきとした正統派の平曲でござって……」

「まあなんでもいい。そのびよんの術をオレに教えてくれ」

「平曲でござるが……、まあよろしい。それではまず、琵琶をばこのように構えて……」

鎧は義平に琵琶と撥を持たせて弾かせてみた。だが初めてのことで、どうにも音が出ない。

ぺんぺん。

「ああ、だめだめ。そうではござらん。もっと地の底から響くように」と鎧は琵琶を受け取り、びよんと弾いた。

すると遠くで逃げ遅れた源氏の武将がぎゃつと言って地面に倒れ込んだ。

「あ、わかったわかった、こうだな」と義平は琵琶を奪い取り、べろーんと鳴らす。

「ぜんぜんダメでござる」

「なにを、このやろう！」



「先生とお呼びなさい」

「わかったよ、センサー。だから、こう構えて、こうか？」

ぴよいーん。

「そうじゃなくて、こう！」

びよーん、と鳴ると、また遠くで数人が悲鳴をあげて倒れる。

「はい、やってみる」

ぴよーん。

「ああ、違う違う。こう！」

びよーん。

「むずかしいな。こうか？」

びびーん。

「あー、ダメダメ！ さつき教えたでしょ！」

このやりとりをずっと眺めていた供の者は、退屈して地面に座り込んだ。

「なにをやっているのやら。大将の物好きに付き合わされて、ただ待ってるこつちの身にもなつてほしいね。これじゃ、退屈で退屈で……」と供の者はびよーんと大きな伸びをした。

「おお、お連れさんのほうが筋がいい！」

かくして源氏の大スター鎌倉の悪源太源義平の自尊心をくじき、かつ大勢の源氏の亡霊に多大な心的外傷を与え、意気揚々と帰還した鎧は、その功績を仕方なく認められて、平家の亡霊が集まっているところからうーんと離れた場所に領地を拝領。おまけに運の悪い家来もあてがわれ、亡霊界の一国一城の主となったのでありましたとさ。



平びらびら伝 源氏軍をなぎ倒すの巻

<http://p.booklog.jp/book/58976>

著者：金井哲夫

絵：中川善史

文豪堂

<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58976>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58976>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ